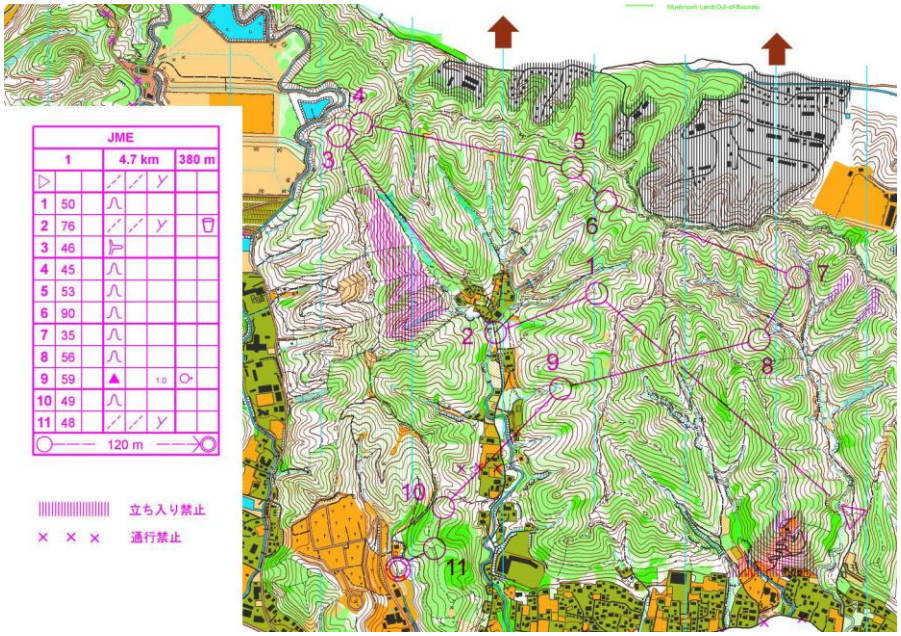
イベント報告

穏やかな天候に恵まれた運営

鈴木博実

第 32 回ジュニアチャンピオン大会　2015 年 1 月 18 日 東京都日の出町

2015 年1月18日 東京都日の出町
第 32 回ジュニアチャンピオン大会



今年は余裕があった設営

今年のジュニアチャンピオン大会は、昨年の寒風の中とは打って変わった穏やかな天気の下、昨年を若干下回る 389 名の参加者を集めることが出来ました。

今年は小学校の副校長先生やスポーツ団体のご理解があり資材搬入や掲示物の提示が前日に行えたことや体育館の開場から参加者の開場時間まで余裕があったことにより、参加者を落ち着いてお迎えすることができました。

ただ、会場は体育館２階と校舎の３階部分に分かれていたので、絵も加えて分かり易いと思った掲示物を相当数体育館に掲示しましたが、３階の場所（トイレ・初心者説明・多目的室）を相当数の参加者から質問を受けました。結果的にみて、掲示の方法のさらなる改善や、掲示以外の方法（音声による案内やプロジェクターによる映写等）の検討が必要かもしれません。

41 名参加した初心者説明

この大会では、ジュニア世代の応援だけではなく、オリエンテーリング競技者の拡大も目標の１つとしています。市民ランナーやトレイルランナー層の取り込みを図り、コントロールは比較的簡単な位置に設置した道走り中心のコースも組んでいたこともあります。

このような取り組みの成果や昨年開催された OMM（Original Mountain Marathon）に参加しナビゲーションの必要性を感じで参加された方も多かったようです。このため、確認できただけで41名の方に初心者説明を利用して頂きました。４名の役員で対応しましたが、スタートまでの短い時間内での説明となってしまったので、十分に説明しきれなかったかもしれません。

初心者説明（撮影：上林弘敏氏）

スタート時間帯の短縮

昨年の大会では、スタートまでの距離があったこと、MAL クラスに合計 140 名のエントリーがあったことでトップスタートに近い参加者には慌ただしい思いをさせてしまいました。今年は MAL クラスへのエントリーが約 90 名と大幅に減少したことにより、スタート時間帯を昨年の 140 分から 104 分へと大幅に短縮し、スタート開始時刻を約 30 分遅くすることができました。

MAL クラスのエントリー数が減少した一方で、BN クラスを中心に増加し、ほぼ昨年並みの 399 名（14 名減）のエントリーがありました。このためスタート時間帯が短くなった分、同時スタートする人数を増加さなければいけませんでした。これには、昨年まで採用していた、最初と最後の時間帯のスタート人数をピーク時より減らす富士山型を、最初から最後までほぼピーク人数をスタートさせるカステラ型に変更することにより対応できました。

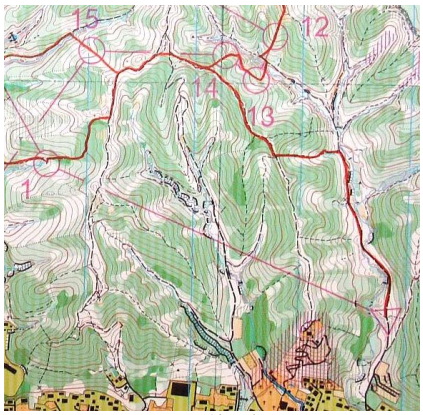
スタート地区の課題としては、１分前枠での手順が分からずうろうろしてしまう初心者（特にランナー系と思われる方）がいたことが挙げられます。初心者説明の短時間の説明で身につけろというのは酷な話ですので、何らかの初心者対策を考える必要がありそうです。

思い通りにはいかないコースプラン

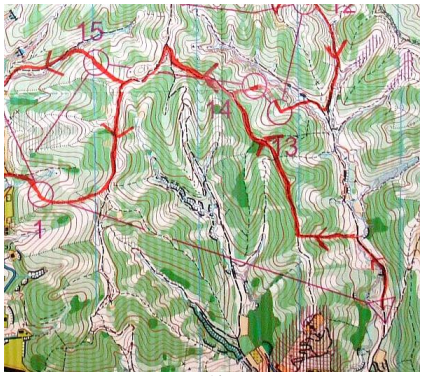
当初想定していたフィニッシュへのルートは伐採の影響により大幅変更になり、結局急な坂道を下るルートとなってしまいました。朝の段階では、坂の最後の土の部分に霜柱が立ち、滑るのは目に見えていたので、けが人を心配していました。結果的には掲示やテープによる誘導の効果もあり、けが人を出さずに済んで安心しています。

JME クラスでは、優勝候補をはじめとしてペナが続出しました。多くが隣接コントロールをチェックした結果でした。もう少し番号確認等基本的な動作の徹底を意識してほしいと感じました。

今年の大会では、上位クラスを中心に、スタートから１番までルート選択に迷うレッグを用意しました。多くの参加者はルート選択に迷ったのかもしれませんが、各クラス上位選手の多くが大きく道を廻るルートを選択したことは、残念な結果でした。次回この平井地区で開催する際には、もう少し工夫し、ルート選択が分かれるようなコースプランを提供したいと思います。



MAL１２位　柳下選手のルート



MAL２１位の戸上選手のルート

フィニッシュと読み取り所の一体化

この大会では、これまでフィニッシュとカード読み取り所が離れていましたが、今年の大会ではこれを一体化しました。この狙いは読み取りエラー対策です。

これまで冬場の大会ということで、E-カードが不調になり、データを読み取れないなど、読み取りエラーが多く発生していました。初心者やジュニアが多い本大会では、なるべく多くの参加者の記録を復元してあげたいという思いから様々なバックアップ体制を取ってきました。ただ、フィニッシュと読み取り所が離れていることにより確認に時間が掛かってしまい、表彰対象の決定にも影響が出ることもありました。

この時間短縮のために、今年は読み取り所と本部の計算センターを携帯電話によるテザリングで結ぶことにしました。準備段階ではうまくいかず的場洋輔氏の助けを借りる等、細かなトラブルはありましたが、本番では問題なく動作しました。

結果として、天候に恵まれ気温が比較的高かったおかげで、E-カードの読み取りエラーは 2 件だけだったので、今回の試みがどの程度効果があったかは定かではありませんが、フィニッシュから読み取り所までに行く間で発生したかもしれないエラーを防ぐ効果はあったと思います。副次的効果として、フィニッシュ閉鎖決定や未帰還者人数の把握がスムーズになりました。

今年は競争となった JWE

昨年の大会では、JWE の参加者が山岸選手１名という寂しい結果となりましたが、今年は３名の出場となり、見事宮本選手が 2 位の山岸選手に大差をつけての優勝となりました。

一方、JME ではペナ続出ということもあり、昨年よりもやや差がついた結果となりましたが、見事大石選手がしました。

ジュニアクラスの上位の成績は２月号を、それ以外の成績については、ラップセンターや大会ホームページ(http://www.orienteering.com/~tama/jc/jc32/index.html)をご覧ください。

恒例のルート検討会・ルート掲示・ジャンケン大会

今年も例年通り JME のルート検討会、巨大マップによる各コースのルート掲示およびジャンケン大会を行いました。

今年のルート検討会には、エリートランナーが参加せず、やや盛り上がりを欠いた感があったかもしれません。しかし、あまり他では見ない企画なので、もう少し参加者を巻き込んだ場になるようにして、続けていきたいと考えております。

今後の課題

今回、大会がスムーズに運営できたのは、事前の地元交渉がスムーズに進んだことと、クラブ員が大会運営においてスペシャリスト化していることが挙げられます。言い換えるならば、一部のクラブ員に依存していると言ってもいいでしょう。これは今後の大会運営を考えていく上で、とても危うい状態でもあります。いかに複数のクラブ員で同じ仕事を分担し代行できる体制を築いていくかが、今後の重大な課題となっています。

（鈴木博実）